

鴻 koh

月刊俳句誌

令和4年4月1日発行

(毎月1回1日発行)

第17巻第4号 通巻190号

4 月号

2022



画

伊吹嶺に雪直弼の城に雪

臘梅の香が墳までの道標

鴨を遊ばせ鳩を遊ばせ水温む

檀林のありたる寺に別れ霜

葦原は日溜りの道雉の道

掲示板に野焼の報せ伊吹晴

茶畑のところどころの霜くすべ

囀りの真つ只中にゐて独り

籬やらひの豆踏んでゆく石畳

春一番写経の筆の湿りがち

陶房に入り陶房の隙間風

居残りの鴨に日向を空けて置く

涅槃図の黙に明るさありにけり

黙の明るさ

主宰作品

増成栗人

デージー

谷口摩耶

副主宰作品

行徳にて

早梅や江戸の名残の常夜灯

探梅のゆるゆると歩を進めけり

ブティックの窓辺に春のカーディガン

早春の厨にしばし菜を刻む

雑炊にちりめんじやこを零し入れ

デージーの日溜り豆腐売りの笛

白梅の開花ワクチン接種の日

露の臺水音高くなりにけり

夕焼のいろ映りしか姫辛夷

本降りの雨デージーは花を閉づ

春一番が吹くと、懐かしいような寂しいような音がして、胸が締め付けられそうになります。沈丁花の匂いがふっとした時もそう、胸がいつぱいになります。それは子供の頃や青春時代に吹いていた風のように、時間という風に飲み込まれてしまいたいそうなのです。いつの間にか長く生きてきてしまいました。早春は私にとって、郷愁に浸るときなのかもしれません。

俳 作品抄

同人選

よき知らせあり雪の舞ふ昼の刻
山岸明子
なづな七草妻の囃子で打ちにけり
待場陶火
水戸藩の烈士の石碑雪が降る
田邑利宏
まつさらな沖あり牡蠣を啜るとき
山崎正子
水仙花いつそ子供に返らうか
祐森司
横顔の子規の似顔絵伊予の冬
西條弘子
絵硝子のランプシェードを拭ひ秋
美濃律子
かぎろひの降臨の地の飾り白
松田那羅生
風切羽見ゆる高さに鷹の舞ふ
藤原明美
七種を待てずに粥を作りけり
畑田久美子
若菜野にひかりの梯子降りて来る
北村操

増成栗人 選

会員選

明の春白色尉の面ひとつ
神野未友紀
松七日湖面のごとき寺の床
井上つぐみ
脱衣婆も閻魔も寒き真暗がり
横山光榮
老いてなほ頼られてゐる年の暮
黒川みつ恵

ふるさとの雑煮食べたく里帰り
武藤敏子
夫逝きて八年となり風花す
山田世都子
破魔弓売る巫女は娘の同期生
小林和子
雪よ雪どこまで隠し通せるか
山田ゆきこ
茜してフォークの如き冬木立
長沢ひろり

谷口摩耶 選

山彦集

増成栗人 選



松戸 山岸明子

拭き上げし窓に淑気の漂へり
よき知らせあり雪の舞ふ屋の刻
冬深しやはらかき日を浴びよ樹々
初めての嬰の寝返り日脚伸ぶ
ポストには旅のカタログ春隣
春遠からじ干布団たたく音

川西 待場陶火

大旦大蛇のごとき百の磴
なづな七草妻の囃子で打ちにけり
冬うららギリシア文字を繙けば
地団駄を踏み綿虫の自在かな
日の短雀の影もなき砂場
うたたねの玻璃を撃ちたる冬の蠅

流山 田邑利宏

馬で上りし人あり冬の愛宕坂
水戸藩の烈士の石碑雪が降る
太郎月真白き猫の畏まる
口遊む鉄道唱歌寒に入る
雨過天晴小吉の初御籤
それぞれの背にそれぞれの冬の在り

船橋 北村 操

早梅や床几に深き息をして
しぐるるや地蔵が経を誦しさうな
若菜野にひかりの梯子降りて来る
灯を入れぬままに時雨を見てをりぬ
小正月衣桁に母の絵羽模様
一陽来復襖の瀧に日矢が降る

岡崎 神野未友紀

一房のバナナ吊られて去年今年
家鴨出てくるあらたまの野辺の日に
明の春白色尉の面ひとつ
淑気満つ水琴窟の朝の音
四阿を溢るる日差し笹子鳴く
若菜摘み静かな雪となりにけり

仙台 佐藤あさ子

誕生日ふんはりふはり雪が降る
うしほとは学級文庫笹子鳴く
枯野ゆく日を総身に浴びてゆく
巖を打つ瀬音に淑気ありにけり
七種粥母の遣ひし椀に注ぐ
あかときの四方を鎮めて雪の嶺

習志野 美濃伴子

絵硝子のランプシェードを拭ひ秋
枯芝に軟着陸のブーメラン
釈迦生るる日よ潮の香の交差点
木の芽晴フランスパンの紙袋
プルーストに倦み蓬生の風の中
アガパンサスの蕾つんつん南吹く

柏 井上つぐみ

いてふいてふ回転ドアの向う側
冬あたたか芭蕉を辿る絵画展
古民家の開け放たれて冬ざるる
茶が咲いて探し当てたる友の墓
石路の花誰とも会はぬ一日なり
松七日湖面のごとき寺の床

葛城 松田那羅生

先生の机の上の喧嘩独楽
かぎろひの降臨の地の飾り白
流れゆく雲の速さよ枯木山
餌台にふくら雀の二羽三羽
冬木の芽葛城の空青くなる
磐座に日の届きたる大旦



『死刑囚・大道寺将司と俳句』

山岸明子・著 第23回山本健吉評論賞受賞作

『鴻』同人の山岸明子氏が、第23回山本健吉評論賞を受賞されました。まことにおめでとうございます。選にあたられたのは『岳』編集長で現代俳句協会副会長の小林貴子氏と、日本伝統俳句協会常務理事の井上泰至氏で、両氏の真摯な選評と明子氏の『死刑囚・大道寺将司と俳句』全文は、俳誌『俳句界』3月号に掲載されている。

評論の題材になった大道寺将司氏は1974年8月に起こった「三菱重工爆破事件」の主犯格として逮捕起訴され87年に死刑が確定。その後病気のため2017年に東京拘置所で死亡した。死刑が確定してからはずっと独房生活が続き、外界との接点は弁護士と母親との面会と文通のみであった。

手紙には過去の事件についての内面の記述が多くはなかったと明子氏は言う。「しかしやがて俳句を詠むようになって過去の事件のことやその後の気持ち、悔悟と罪悪感について、心の内に滾る思いを表現するようになっていく。たまたま

刑務所にあった芭蕉の本などを読むうちに、狭い病床で死の間際まで俳句を作り続けた正岡子規に傾倒。おそらくは自分の境涯に重ねるようにして独学で作句を始めたのだった。

まず明子氏が死刑囚の俳句という、ある意味、スキャンダラスなものを題材に選んだことに驚かされた。確かに将司氏の第3句集『棺一基』は詩人の辺見庸が絶賛したこともあって大きな話題になったが、将司氏が亡くなって以降、その存在と句は次第に忘れ去られようとしていた。そこに再度、光を当てようというのだから、明子氏の意欲は注目に価する。テーマ設定の意外さと、数多の資料を当たり尽くした粘り強さが受賞に繋がったのではないかと思われる。



ある日、明子氏はふと目に留まった新聞のスクラップから将司氏に興味を抱き、精力的に資料を漁っていく。評論の基になるのはこうした下調べで、そうした地道な作業の中でこそ対象への思いは熟成されていく。

俳人の境涯が俳句の価値を左右するわけではないことを百も承知で、明子氏は将司氏の事件に至った心情と行動を追っ

その上で、将司氏の遺した俳句の分類を試みる。事件の被害者に対する「謝罪の句」、自分の人生に対する「悔恨の句」、自分の信念を社会に伝えきれなかったことへの「無念の句」などが、四冊の句集の中から丁寧に拾われていく。

謝罪の句としては「死者たちにかかにして詫ぶ赤とんぼ」「曇鳴くや罪の記憶を新たにし」。無念の句としては「時として思ひの滾る寒茜」「草萌ゆる時にあがる狼火かな」が挙げられている。興味深いのは身近な虫や植物に向けられた句だ。「実存を賭して手を擦る冬の蠅」「向日葵の裁ち切られても俯かず」

これらの句に関して明子氏は、将司氏が自分の思いを詠むようになる、それに見合った季語や景を記憶の中に探すようになってく述べている。俳句は普通景やモノに触発されて詠まれるものだが、将司氏はその逆で、「始めに思いがあり、俳句を詠むことで現実にはない自然が現出する。身の周りに何も無い大道寺は俳句を詠むことで奪われた世界を一時的に取り戻すことができた」と鋭く指摘。

たとえば「向日葵」の句には、同じ獄中句でも「そこにあるすすきが遠し濫の中春樹」とは似て非なる成り立ちがある。「そこにある」の句は、近い未来に出所することを前提として「奪われた自然」が詠まれている。だが「向日葵」や「冬の蠅」に未来は見えない。

これらの絶望的な句群は、どうして生まれたのか。明子氏は将司氏と俳句の関係性について考察する。謝罪の気持ちや罪悪感が大きかったが、将司氏はそれを文章として書くことを潔しとかなかった。しかしながら俳句を作るうちに、「抑えること省くことで伝える抑制の文芸であることが心の内を詠むことを可能にしたのではないかと推測。続けて「具体的に綿々と思いを語ることなく、内面に渦巻く罪悪感や様々な悔悟、無念さ、空虚感等を詠めることに気が付き、自分が一番表明したいことを詠うようになっていったのだと思われる」と記す。もしかすると、これは将司氏のことであると同時に、明子氏自身の俳句観なのではないか。

評論は最終章に至って佳境に入る。章

のタイトルは「彼の句が心を打つ理由」で、いよいよ明子氏の思いが語られる。明子氏はまず将司氏の若々しい正義感に共感する。また、達成されなかった夢を未だに持ち続けていることにも共感する。その共感には「世界の矛盾と哀しみを引き受け、そこから逃げ出さなかった大道寺は過激な行動に至ってしまった」と表現されている。さらに「大道寺は、この社会で生きていくために我々がどこかで捨ててきてしまった若き日の純粹さを持ち続け、それ故に大罪を犯し、課された重い荷を担いながら、自らの過去を朝な夕な反芻する生を生きただのである」とも。

題材も含めとても刺激的な内容で、読み物としても整っており、まさに受賞にふさわしい一篇だ。この力量を是非とも『鴻』誌で發揮していただきたい。失礼ながら、もしこの力作に提案があるとすれば、最後に引用した文中の「我々」を、「私」に置き換えてみたらどうだろうか。そのとき、初めて論者の責任と人物が浮かび上がるからである。

「厭はれしままにて消ゆる秋の蠅 将司」



「代官山・最先端にして最深部」 鈴木 崇

「いもり川」という名の川が広尾の谷地を渋谷川まで流れており、現在は川跡を残す暗渠となっている。

日本赤十字社医療センター前の坂を少し降りたところに「いもり川階段」と立札のある小さな階段がある、格好の「暗渠サイニング」で、階段を降りると川床を歩いているような気分になる。高級住宅街に昔ながらの地形を感じられる場所があるとはうれい。

このエリアは大使館が多く点在し、日赤通り沿いにはチエコ共和国大使館がある。なかなか立派な建物で、よく目立つ。

しばらく歩くと私の母校である國學院大学のキャンパスが見えてくる。校舎は高層ビルとなり、在校中とは雰囲気がいびつ変わった。渋谷といえども、にぎわいとは遠いエリアで、のんびりした校内の空気は変わらない。

特色といえば、神道学部があるので、キャンパス内に神殿がある。神職の装束を着た

学生が校内を歩いているキャンパスはなかなか非日常の光景であった。

大学の向かいには氷川神社がある。参道をよく通学の抜け道に使わせてもらっていた。境内には江戸郊外三大相撲の一つ・金王相撲場の跡がある。大変な人気で、凶作の年に中止しようとした時もおのずと人が集まってしまい、結局興行することになった、というエピソードもあるそうだ。

明治通りに出て、山手線、埼京線を猿乗橋から渡り、代官山に向かう。ファッションスポットがひしめくこの地域に古代住居跡公園がある。弥生時代の遺跡が発掘されたため整備された公園である。

代官山を代表する複合施設・ヒルサイドテラスの敷地内には猿楽塚がある、こんもりした築山で、古代墳墓の一種。流行の最先端エリアに歴史の最深部が遺されているところがおもしろい。

以前は、ファッションの街としてしか見ていなかった。「a, p, c」というフラ

ンスのファッションブランドがあり、ジーンズが有名で、このデニム生地は表面がバリツと硬く内側がソフトな手触りとなっており、「フランスパンの様な風合い」と評されているのだが、そのフランスパン・ジーンズをわざわざ買いに来た思い出がある。

ヒルサイドテラスの脇に旧朝倉家住宅がある。ヒルサイドテラスのオーナーは朝倉家、旧朝倉家住宅は元渋谷区議会議員の朝倉虎治郎が建てた邸宅である。観覧料100円で邸宅と庭園を見学できる。

目黒川の谷に落ち込む斜面を利用して造られた回遊式庭園は壮観だ。かつては視界を遮るものがなく、中目黒の風景が一望できたことだろう。隠れ家的時間旅行スポットである。



代官山・旧朝倉家住宅庭園

羽音集 選 谷口摩耶



会津 武藤敏子

豊橋 山田世都子

書き初めを書くため広く新聞紙願ひ事を胸に初日に手を合はすふるさとの雑煮食べたく里帰り小春日やセーターほどこき編み直す一人酌む屠蘇にほのかに酔うてをり飛びさうな冬たんぼの坂をゆく朝カフエの厚焼サンド寒卵エプロンを少しきつめにこまめ煮る対岸の水仙白く灯りしか夫逝きて八年となり風花す

土浦 小林和子

小樽 山田ゆきこ

流山 長沢ひろり

札幌 北城美佐

初詣 焚火に集ふ人の数
一人居を気づかつてゐる初電話
破魔弓売る巫女は娘の同期生
木菟啼いて別居してまで棲む山か
ストレッチの九人の輪の息白し
空青し初心に返る筆始
悠々と窓を狐や白き朝
星空を崩さぬやうに寒波来る
人の名を思ひ出せずに室の花
雪よ雪どこまで隠し通せるか
ポインセチア花舗の電飾灯るころ
千両の実よまつさらな朝の風
鍋焼にしやうか雨意の日本橋
茜してフォークの如き冬木立
日溜りを探す黒猫久女の忌
若水の珈琲甘く香りけり
無造作に土間に置かるる冬菜かな
冬空や両手広げて掴む青
マヨネーズたつぷりつけて氷下魚食ぶ
立春や新調したる長財布

茶庵閑話 46

虫丸



吟行の
心がまえと
して
地名で詠むな
風土を詠め
と言われ
ますが
地名や
固有名詞の入った句を
作るなという
ことで
しよう
か



謂れのある地名をまらずと
考えないで、
日常や自然詠
の中から風土
を浮かび上が
らせることを
心がけよう
ということ
安易に使うと
固有名詞に
凭れた句に
なりやすい



使うのであれば
固有名詞と
内容が補完
しあって
感動として
伝わる句を
目指せという
戒めだね

〜X〜!!



フユト
さんは
趣味と
食欲が
補完しあって
いるんですね

<http://www.haisi.com/koh/index.htm>